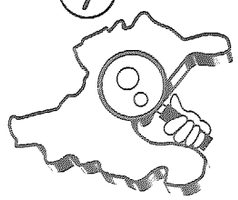
横越町のあんだ道を覗いてみよう

横越歴史探訪⑦

戦後復興・住宅団地造成 人口増加を続ける横越町



戦後復興

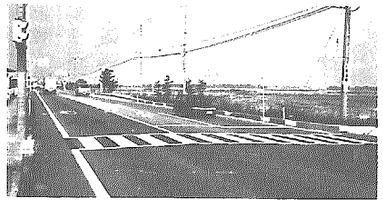
戦後の農地解放は、まさに自由と民主主義の時代を反映するもので、農家は再び活気を呈し、酪農、養鶏、養豚等の多角経営化が取り入れられていきました。

戦後、新たに婦人会や青年団が結成され、生活改善への研修会や公民館活動、スポーツ、さらに学校の体育館では映画会も開催されたほか、公民館では、村民が結婚式を挙げることもありました。

そんな中、昭和34年に着手した広域簡易水道事業は県内でもいち早く行われたもので、伝染病の発生を防止しようという主婦たちの強い要望から生まれたものでした。公民館ができ、学校に新しい校舎や体育館ができ、村内にも近代的な施設が次々と登場するようになりました。

わが国は復興から新たな高度経済成長時代へと突入し、農作業にも機械が導入され、そして台所は給水施設の普及と同時に明るいキッチンへと改善が進み、真新しい電化製品が目立つようになりました。

直営診療所、教員住宅、冬季分校（焼山）ができるなど、昭和30年に入ると住環境も次第に新しい装いとなり、戦後の面影は姿を消していきました。



茜ケ丘地区の移り変わり
写真上は平成4年秋、写真下は平成16年8月に撮影。

住宅団地造成

昭和30年以降、日本経済の成長は著しく、盛んに住宅の改築が行われるようになりました。

昭和40年代後半から、農家の次男や三男が新潟や亀田に住居を求める傾向が生じ、就学児童も減少。人口減少を食い止めるために、より安価で環境のよい住宅地の造成が急務となりました。さらに、新潟市の人口が急増していくことに伴い、近郊の黒埼町（現新潟市）、亀田町、豊栄市、新津市などとともに、横越村にも新潟市のベットタウンとしての役割が求められるようになりました。

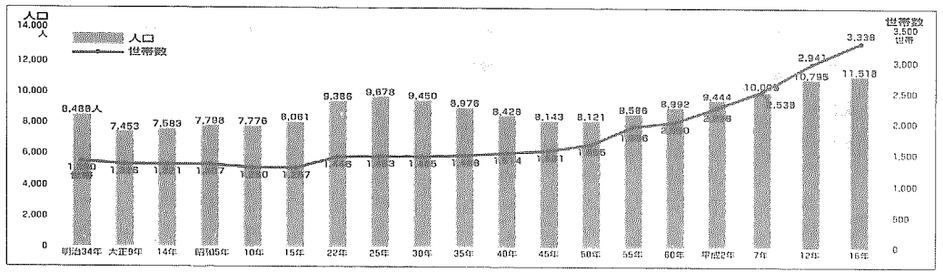
横越村では、昭和45年の都市計画区域の線引き以降、民間主導型の宅地開発が進展。昭和46年には県内の農協の中で初めて宅地造成計画が進められ、2万9千平方メートルが横越地区に造成されました（農協第一団地）。さらに昭和47年に川根谷内地区で日東団地、昭和48年には二本木地区で寿団地の造成工事が着手され、市街化が進められました。昭和59年、浅見村長から諮問を受けていた横越村総合計画審議会が、工業団地の設置や町制施行の実現などを盛り込んだ第三次基本構想案の答申を提出しました。その後、村内における宅地の需要は次第に増加。昭和63年、横越中央土地区画整理組合による大規模宅地造成工事が始まり、現役場庁舎・中央保育園周辺が整備されました。近年では茜ケ丘ニュータウン、うぐいすニュータウン、いぶき野ニュータウン、現在は横雲ニュータウンが造成され、今や県内有数の人口増加率となっています。

人口の推移

国勢調査の人口の推移を見ると、調査を開始した大正9年以降ゆるやかに増加、戦中戦後期に急激に増加したものの、高度経済成長期の人口流出で昭和25年以降減少。その後、新潟市近郊の立地条件を活かした宅地造成などによる転入者が増え、昭和50年以降急激に増加しています。

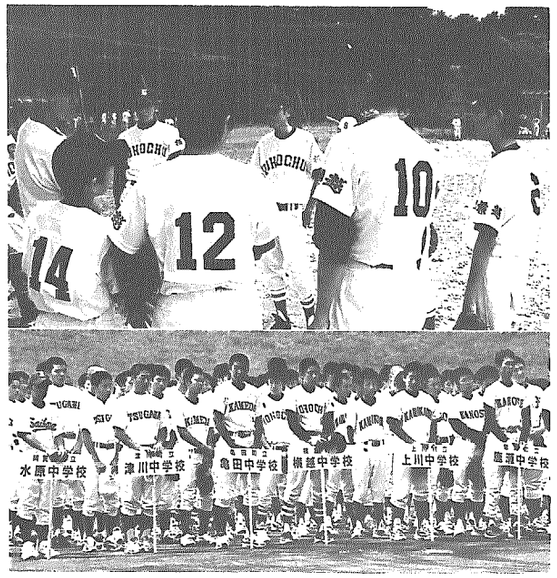
平成6年9月、横越村の住民基本台帳人口が1万人を突破。平成7年10月、国勢調査としては初めて1万人に達し、平成8年の町制施行に向けて大きな弾みとなりました。

横越村・町の人口および世帯数の動き



明治34年の数値は本籍人口、平成16年は3月31日の住民基本台帳人口、これ以外の数値は国勢調査による。

カメラアングル CAMERA ANGLE



猛暑の中の熱戦！ 磐越道沿線少年野球大会に横越中学校野球部出場

7月24日・25日の2日間をかけて、福島県いわき市平野球場ほか5会場で、磐越自動車道沿線都市交流会議主催による少年野球大会が開催されました。

この大会は今年で8回目を迎え、磐越自動車道沿線都市の都市間連携と交流促進を図ることを目的に開催されています。今年は新潟・福島両県の中学校22校が参加して熱戦が繰り広げられました。

横越中学校野球部は、正午過ぎの猛暑の中、いわき明星大学野球場で福島県喜多方第二中学校と対戦し、懸命にプレーしましたが善戦及ばず、0対5で敗れました。その後行われた親善試合では、福島県北会津中学校と対戦し、12対3で勝利して、3年生は中学生活最後の試合を終えました。

なお、大会は横越中学校を下した喜多方第二中学校が準優勝し、優勝は福島県いわき市磐崎中学校でした。

すっかり定着した「のぎくの家夏まつり」 現在の場所で最後の開催　大いに盛り上がる

7月24日、上町の小規模通所授産施設「のぎくの家」で、今年も夏まつりが開催されました。

のぎくの家は、障害を持つ人たちが資源回収などの活動を通して、社会参加・自立を目指す通所施設です。このまつりは、通所者と地域の人たちとの相互理解を深めようと毎年開催されており、今回も中学生や地域の方々、ボランティア団体など多くの人たちが協力しました。

まつりでは、のぎくの家の通所者による歌と楽器演奏、合唱団のぎくによるコーラス、地元保存会による伝統の神楽舞、中国楽器の二胡演奏、インド舞踊なども披露。また、会場周辺では、通所者が作った手すきハガキや廃油せっけん、アクリルたわしが販売されたほか、旬の新鮮野菜、わたあめやかき氷、生活雑貨などの販売コーナーも並びました。来年にはのぎくの家が横雲ニュータウンへ移転する予定で、最後に全員で亀田甚句を踊り、現在の場所では最後となるまつりを締めくくりました。

老若男女が無病息災を願う　木津薬師火祭りで火渡りの荒行

手を合わせて火渡りを行う人たち

7月28日、日中の暑さが和らぎ始めた午後7時より、木津の真言宗光明院で恒例の火祭りが今年も開催されました。

暗くなりかけた境内では、町内外から訪れた大勢の人たちの間を割って、山伏姿の修行僧たちが現れ、儀式が始まりました。儀式では、弓を使って結界を張り、斧や剣で道場内の魔を払い、迷いを断つというもので、ほら貝の音が高々と鳴り響く緊迫した儀式に、大勢の観衆が見入っていました。

その後、人間の煩悩を表すという山積みされた薪に点火。白煙が立ち上がった後、瞬く間に薪が天高く音を出して燃え上がり、炎の明かりが人々の姿を煌煌と照らし出しました。火が衰えた頃、いよいよ火渡りの荒行の開始。修行僧らが順に念を込めて素足で渡り始め、続いて子どもからお年寄りまで町内外の多くの人たちが素足になり、思い思いに祈祷して火床を渡りました。